



TITLE:

雲岡便り

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 雲岡便り. 東洋史研究 1938, 3(5): 425-425

ISSUE DATE:

1938-06-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145625>

RIGHT:

ある。方丈圖といへばその大體の大きさは東方文化研究所で編纂した『東亞大陸諸國疆域圖』の四倍大位である。この疆域圖のスケールは四百萬分の一であるが裴秀の圖は一寸百里であるから百八十萬分の一といふことになる。この一寸百里といふ縮尺は、裴秀の説を

遵奉した唐の賈耽の圖にも繼承されてゐる。支那の古地圖の縮尺については、他日詳しく考へてみたいと思つてゐるが、今はたゞ傳暢の記事を紹介するにとどめる。

雲岡便り

水野 清一

雲岡も漸く暑くなりました。綠陰も深くまりました。一個月前は洞窟内の調査に足の先が冷えて困りましたが、やつと洞窟内の涼しさが慕はれるやうになりました。濃い緑のかたまりは柳です。大地は漸く青味を帯びて來ました。空は飽くまで青く、夏雲がたゞよつてゐます。川幅だけの谷間ですが、低い丘で晴々としてゐます。時間改正で、内地と同じ時間にになりましたから、七時頃にはまだ太陽が第三洞の丘の彼方にあり、その代り夜の八時頃まで明るく夕方の靜かな景色を嘆賞してゐます。見物人は毎日

多くうるさいものですが、それがたまさか今日のやうに來なくなると何だか淋しいやうな氣がします。石窟の調査はとにかくとして、このほかに殿堂樓閣もあつたらうと搜索に努めてをりますが、未だに瓦の一片だに現れません。第九、第十洞、通稱五華洞の前を發掘して前面にあつた建築物の正體を確めようとしてゐます。磚を敷きつめ、切石を積んだ、大きな礎石の建物下部に出て參り、發掘監督の小野君は力んでゐます。果して遼金時代にまで遡りうる遺構かどうかを確めようとしてゐますが、出土の瓦が少く困つてゐます。しかし、相當に堂々たる建築物で、現在の伽藍よりははるかに大規模です。